無限の鉱脈。政宗

「独眼竜」の渡辺謙 緊張もやっとほぐれ

渡辺謙＝東京・丸の内の東京会館

視聴率も好調のNHK大河ドラマ「独眼竜政宗」の主人公、伊達政宗。幼、少年時代の後を受けて、八回目から渡辺謙が登場した。「かなり落ち着いてきて、放送を見るのが楽しいんです。収録したのがどういうふうにつながるか」。ようやく緊張もほぐれたところだ。

番組の人気は一月のスタート直後からうなぎ上り。彼の登場前に四〇％を軽く超して、大河ドラマの歴代最高視聴率二位をマークした。中村克史プロデューサーも「渡辺謙君がかわいそう」と、プレッシャーを気遣ったほどだ。

「三七、八％になった時はプレッシャーを感じましたが、四〇％を超えてからは実感がなくなりましたね。それより視聴率を変に意識して現場がぎくしゃくするのに気を付けないと」。その冷静さが功を奏してか、登場後、たちまち記録を塗り替えた。

歴史上の人物を演じるのは初めてだという。政宗像を作り上げるために勉強も頑張ったようだ。「ところが、政宗のキャラクターの〝埋蔵量〟が測れなかった」と、政宗の性格を鉱脈に例えた。

「普通、人間を掘っていったら、ある感触がつかめたりするものだけど、今回は掘っても掘ってもつかめない。鉱脈が一直線じゃなく、四方八方に延びていて、混とんとしているんです。最初はポイントを決めて、一つの鉱脈を掘り下げたんですが、ジェームス三木さんの脚本がいろんな鉱脈に走り出して、別のところを掘ってみるとどんどん広がっていく。例えばユーモアとか温かさとか…」

ようやく見通しが利くようになったのは三月二十二日放送の「輝宗無残」辺りから。

「父が死ぬところで、峠に来ちゃったなという気持ちがしました。ポンと峠に上がると季節も変わって、いろんな道が見えて、どの道を進むか選ぶこともできるようになった」

暇な時間も、番組のために能や茶道を習う、政宗にどっぷり浸った生活だ。「現代の僕たちの感覚もいっぱい盛り込もうと思っていますよ」という笑顔も、政宗に重なってくる。

河北新報　昭和62年(1987年)4月5日掲載